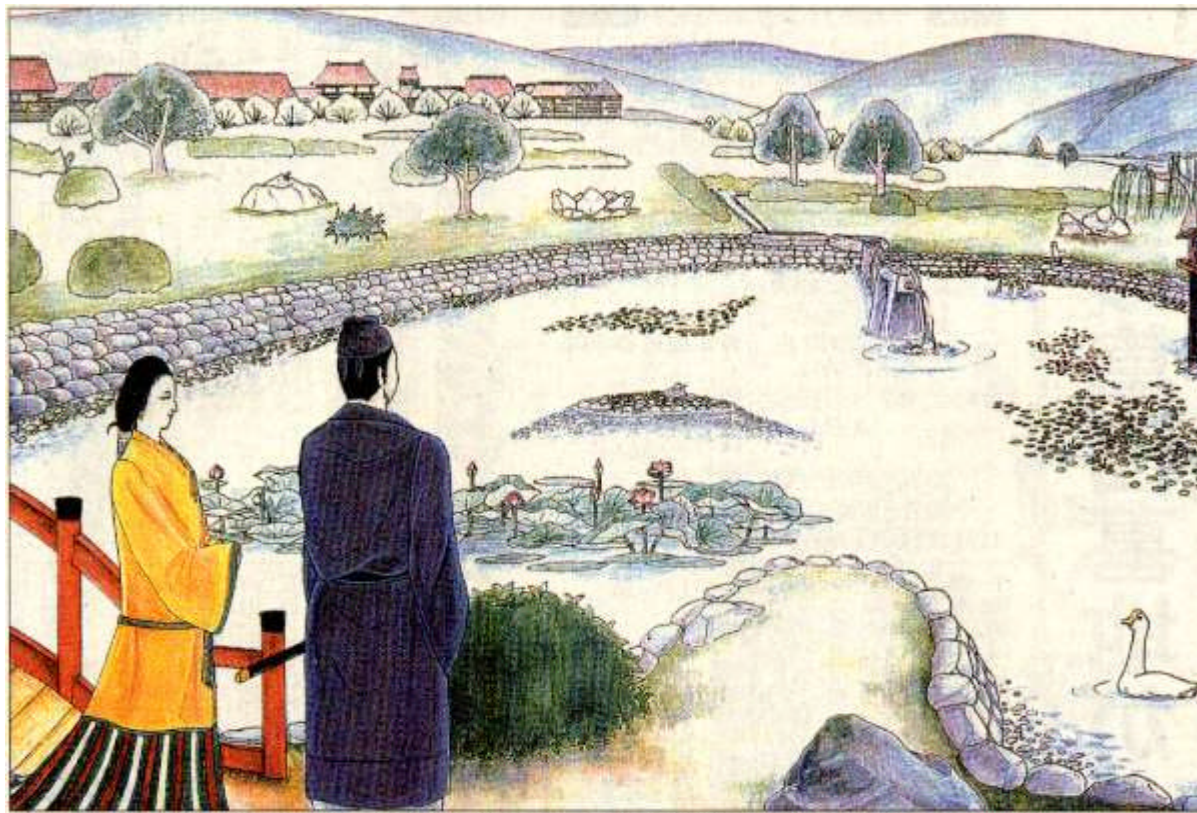


# 飛鳥時代の大庭園跡 奈良・明日香村

## 池に流水装置・涼み床

### 日本書紀「白錦後苑」の可能性



遺構をもとに描かれた「飛鳥京庭園」のイメージ図（奈良県立橿原考古学研究所作成）

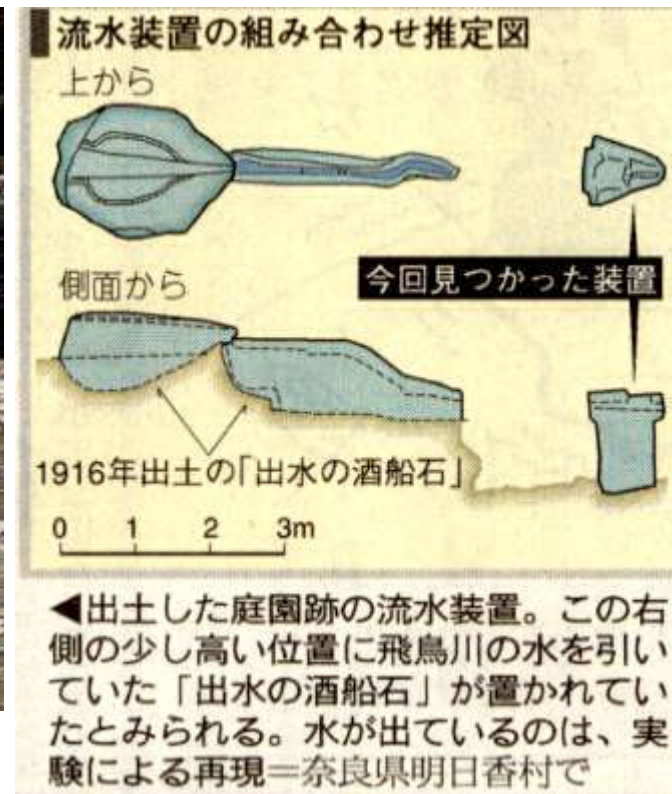
飛鳥時代の大規模な園池跡が奈良県明日香村で見つかったと、同県立橿原考古学研究所（橿考研）が十四日、発表した。天武天皇（在位六七三 - 七八六年）が即位した飛鳥京（飛鳥浄御原宮）の宮廷庭園である可能性がきわめて高いという。これまでに見つかっている宮廷庭園は奈良時代のものが最古で、今回の「飛鳥京庭園」はさらに数十年さかのぼるという。数千平方メートルの広さとみられる池は、底に石が敷き詰められ、流水装置や中島、池に突き出した涼み床が設けられていた。当時の朝鮮半島の文化の影響を受けて築かれている。

園池跡は飛鳥京跡の北西約百メートルの空き地で見つかり、天武朝時代の土器片が出土した。発掘された分の池の広さは約千平方メートル。人の頭大の石を三段に積んだ高さ約八十センチの石垣で護岸され、水深は推定約六〇センチ。池の底の大部分には、こぶし大の平石が敷き詰められていた。

北端は、池へU字形に張り出していた。中島の一部の可能性が高い。池の中央部分には、南北約六メートル、東西約十一メートル、高さ約十センチの円形に石を積み上げた小島も見つかった。南西端では、岸に沿った柱穴跡（直径二十一センチ）が約二・五メートル間隔で六つ見つかった。涼み床が池へ突き出していたとみられる。

池の南岸から約五メートルの池の中では、高さ約一・五メートル、下部の幅約七十センチ、上部の幅約一メートルの石が見つかった。直径約九センチの穴が三方向に開いており、流水装置とみられる。

日本書紀の六八五年には「天武天皇が白錦後苑を訪れた」という意味の記事がある。今回見つかった池は、広さが発掘された面積の二倍以上あったとみられることや、飛鳥京跡にごく近いことから、白錦後苑の中の池である可能性が高いという。



◀出土した庭園跡の流水装置。この右側の少し高い位置に飛鳥川の水を引いていた「出水の酒船石」が置かれていたとみられる。水が出ているのは、実験による再現＝奈良県明日香村で



#### 「出水の酒船石」

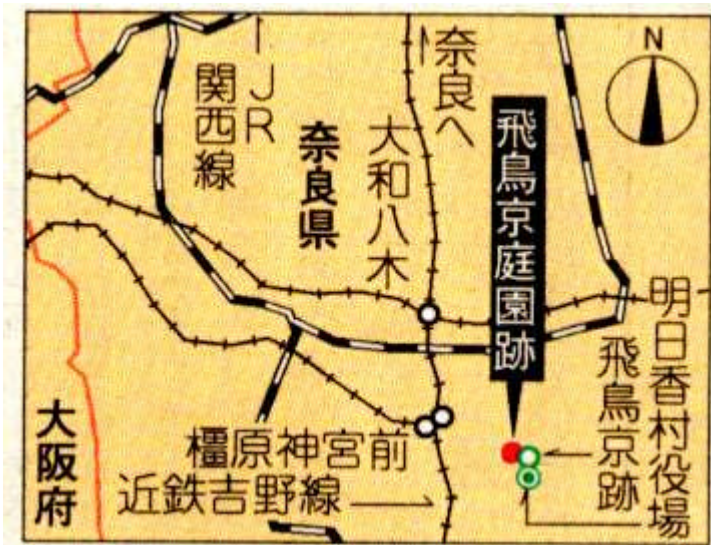
縦四・三メートル、横三・二メートルの平たい石と、滑り台のような傾斜のある縦三・二メートル、横一・五メートルの石。発掘された池の中で、この二つの石が置かれていたと見られる跡と、今回出土した噴水台のような石は、直線上にならんでいる。

二つの酒船石には、深さ十センチ二十巧の溝やくぼみがある。今回、現地では石の水槽（線二・七メートル、横二メートル）も見つかっている。飛鳥川から引いた水を、水槽にためた後、二つの酒船石の溝を経由して噴水台のような石へ流し、この石に開けた穴から池へ噴水のように注ぎ込ませる仕組みだったとみられる。

庭園は朝鮮半島の百済の園池と、新羅時代の園池の両方の特徴を備えており、当時の政権が進んだ文化を採り入れていることを周辺の部族や外国使節に誇示するために造られた可能性があるという。

現地では一九一六年に、この流水装置の一部とみられる「出水の酒船石」二個が発見され、その後売却されて京都市内の民家の庭石になっている。橿考研は、この酒船石の元の位置を確認するため、今年一月から発掘調査していた。この「酒船石」が、飛鳥京庭園の池の流水装置の一部だったことがわかったという。





**飛鳥京跡** <sup>きよみはらのみや</sup> 天武、持統天皇の飛鳥浄御原宮（七世紀後半）の跡や、周辺の関連遺跡の総称。飛鳥には、飛鳥板蓋宮（七世紀中ごろ）など、いくつかの都がこの地域に置かれた。壬申の乱（六七二年）に勝利した天武天皇が、六七三年に飛鳥浄御原宮で即位。持統天皇が六九四年に藤原京へ遷都するま二十年余り都だった。

## 古代朝鮮の興亡映す 新羅の影響 池に色濃く

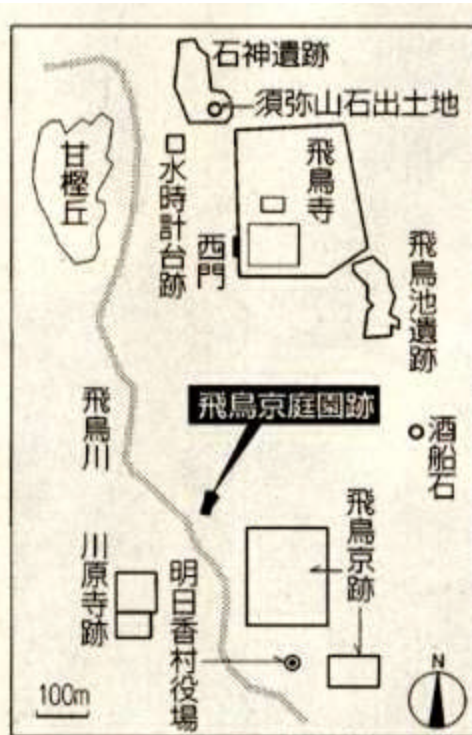
## 飛鳥京庭園跡

沖 信治（奈良支局）

キトラ古墳に描かれていた精密な古代の天文図や日本最古の通貨とみられる富本銭など、考古学の重要な発見が相次いでいる奈良県明日香村で、今度は飛鳥時代の宮殿に付属した最古の本格的な庭園遺構「飛鳥京庭園跡」が出土した。この大規模な園池には、朝鮮半島の百済の滅亡、新羅の



出土した飛鳥京庭園跡 = 朝日新聞社ヘリから



興隆という古代東アジアの国際情勢の変化も映し出されている。日本書紀の記述も多く、古代史の舞台・飛鳥へのイメージを豊かに膨らませる遺跡といえる。

日本書紀は、飛鳥の大豪族だった蘇我馬子（？ - 六二六）の屋敷の庭を紹介している。馬子邸は飛鳥川のほとりにあり、庭には池が掘られ、その中には小島も築かれていた。そのため、馬子は「島大臣」と呼ばれたという。

日本庭園には池と中島が欠かせない。馬子邸の「島」は中島のさきかけだった可能性があるが、該当する遺跡は見つかっていない。今回出土した飛鳥京庭園跡は、馬子の時代より半世紀ほど後になるが、小島を意識した石積みと、中島の一部とみら

れる張り出し部がある。石造りの流水施設は、日本庭園のやり水を連想させる。発掘した奈良県立橿原考古学研究所（橿考研）が「日本庭園の川一ツ」と言うのもうなずける。

飛鳥時代の園池は正方形か長方形で、石積みで護岸をした「方形池」が多い。奈良時代になると、岸の線が屈曲して自然の浜辺のような洲浜帯の「曲池」が主流になり、平安時代に完成する日本庭園へつながる。飛鳥京庭園跡は、護岸などは方形他のタイプだが、岸の線などは曲池タイプで、過渡的な形態と考えられる。

方形池は百済から伝わったとみられているが、飛鳥京庭園跡は新羅の代表的な庭園遺構である雁鴨池（韓国・慶州市）との強い類似性が指摘されている。

橿考研は、日本書紀の六八五年の項に天武天皇が出かけたと書かれている「白錦後苑」が、飛鳥京庭園跡に該当するとみている。飛鳥京跡と目と鼻の先で、「後苑」とあるのも、この庭園に合致する。庭園はおそらく、この年に完成したのだろう。

百済が唐・新羅連合軍に敗れて滅亡したのは六六〇年。日本が百済再興のために援軍を送って白村江で大敗したのが六六三年。以後、日本は新羅と友好関係を結ぶ。飛鳥京庭園跡が百済的な方形池ではなく、新羅的な形態になっているのも、東アジア情勢の変化がしているとみられる。

## 部族に服従誓わす宴も？

今回の発見で注目される点がもう一つある。大化改新（六四五年）の主役、中大兄皇子と中臣鎌子（鎌足）が知り合った場所は、「飛鳥寺の西の榎の木（ケヤキ）」とされ、以後、日本書紀には「飛鳥寺の西」がしばしば登場する。飛鳥京庭園跡から北へ約五百歩行けば、ちょうど飛鳥寺の西になる。

見つかった遺構は園池の南端部で、庭園は地形からみて、北へ延びていたとみられる。日本書紀には、六一年に「持統天皇が御苑で公私の馬をご覧になった」という記事がある。「御苑」は白錦後苑を指すと解釈されており、そうだとすれば、馬を走らせるほどの広さがなければならない。



叢書研の河上邦彦・調査研究部長は「庭園の区画は南北五百㍍、東西三百㍍ほどの範囲が考えられる」といい、「飛鳥寺の西」が含まれるとみている。

「飛鳥寺の西」では、天武朝の六七七年と六八一年に種子島の人々を、六八二年には隼人（九州南部の人々）ら<sup>はやひと</sup>を、持統朝の六八八年には蝦夷二百人余りをもてなす宴が催された。こうした宴会は、辺境の部族集団を朝廷に従わせるときの儀礼の一つとみる説が有力だ。大和の進んだ文化を見せ、服従を誓わせるために、園池や流水装置は効的だったのかもしれない。

## 豪華けんらん 貴族の暮らし

### 庶民は労役・粗食

古代日本の首都で、天武天皇や柿本人麻呂らの万葉歌人も活躍した舞台である奈良県明日香村で、最古の宮廷庭園とみられる大園池跡が見つかった。大きな石を組み合わせた流水装置や涼み床まで備えた「飛鳥京庭園」は、当時の天皇や貴族らの華やかな宮廷生活を浮かび上がらせる。朝鮮半島や中国の先進技術を採用入れたこの庭園で周辺諸国の使節を招いて宴を開き、「庭園外交」を繰り広げていた可能性が大きいという。

#### 舟遊び

庭園跡から見つかった流水施設は三段式。基本的な構造は渡来してきた技術だが、「階段式に水が落ちて、最後に池へ注ぐ流水の仕掛けは中国にもなく、飛鳥の人々の独創だろう」と奈良国立文化財研究所の高瀬要一・計測修景調査室長はいう。他の水深は推定で約六〇㍍。「舟遊びもできたはず。涼み床や中島で宴会をしたのだろう」と推測する。

池には小さな島もあった。亀が甲羅干しをしたり、水鳥が羽を休めたりしたと見る研究者もいる。「東に飛鳥京宮殿、北には飛鳥寺などが見える、壮麗な光景だったに違いない」と門脇禎二・京都橘女子大学長（古代史）は話す。

#### 労役

では、この庭園を造るのに、どれくらいの日数と費用、人手がかかったのだろうか。

昨年、飛鳥時代より後の奈良時代の宮廷庭園である、奈良市の東院庭園（約八千平方㍍）が復元された。その総工費は約二十億円。もし飛鳥京庭園をいま造ろうとすれば、千平方㍍分だけで数億円はかかるという。

当時の庶民の暮らしはどうだったのか。仁藤敦史・国立歴史民俗博物館助教授（古代史）は「米のほか、魚介類や山菜でしのいでいた。しばしば労役に駆り出され、都へ来て、出身地ごとに固まって半年から一年住んだ。飛鳥京庭園の建設にも多くの庶民が駆り出されたはずだ」と語る



出土した飛鳥京庭園跡。池跡に水を張ると石積み的小島や流水装置が水面から顔をのぞかせ、当時の様子が再現された = 奈良県明日香村で

